

第九の歌詞についての、聖書の解釈

1. はじめに

ベートーベンは、ボン時代（1790年前後）にシラーの *An die Freude* に出会い、30年後に完成する交響曲第9番のフィナーレにおいて4人の独唱と合唱でその詩を歌わせました。シラーの原詩は8つの節から構成され、それぞれ前半の詩（v）と後半のコーラス（c）に分かれます。ベートーベンはこの詩から1v-2v-3v-4c-1c-3cという具合に、半分弱を順序を入れ替えて採り、第九に用いました。

詩の全体から、第九の歌には、「神がもたらす友愛、その友愛で結ばれた友人（神の家族）が、やがていくであろう天国で神を賛美する喜びを歌っている」というプログラムが読み取れます。もちろん、この歌詞を「地上界での友愛」に力点を置いた解釈も出来ませんが、18世紀のドイツというキリスト教文化の旺盛な背景を考えますと、この歌詞は「天国という理想郷への希望の歓喜」と解されます。

それでは、歌詞の説明を致しますが、この説明はあくまでも福音的（聖書を誤りなき神の言葉と信じる）な教会の一人の牧師の解釈ですのでこれ以外の解釈はないということをごさいます。

みなさんの歌詞解釈が深まって、歌う喜びが更に増し加わることに少しでもお役にたてればと願ってご説明させていただきます。

2. 歌詞の概略説明（ドイツ語の英語訳を参考にした逐語訳）

（1）、レチタティーボ（叙唱・話すように歌う）

おお友よ、このような音ではない！
 そうではなく、もっと美しい歌を歌おう
 そしてもっと喜びにみちたものを

この部分は、ベートーベンの自作によるものである。

「このような音ではない」とは何を否定しているのでしょうか。

1-3楽章を回顧して、それをそれぞれに否定して、合唱部分に導いていくレチタティーボに思えます。つまり、地上の音楽よりももっと美しく、敬虔なしかも喜びに満ちた天上（天国）の調べの歌に導いているのです。

（2）、241小節：喜びよ美しい神聖な閃光よ

喜びよ、美しい神聖な閃光よ
 美しい娘のような楽園よ
 私達はその楽園に神聖な炎に酔いしれつつ足を踏み入れる
 天なるものよ、あなた（神さま）の聖所へ

楽園は神さま¹が人間を創造された時、人間に与えられたエデンの園という楽園とも言えます。最初の人間アダムとエバは、罪を犯しその楽園を追放されました。私達は主・イエス・キリストを救い主と信じて、罪赦されて、再び最初のエデンの楽園に足を踏み入れることが出来ると聖書に記され

¹ 創世記（聖書の初めの書、天地創造が書かれている）「1:1 初めに、神が天と地を創造した。」
 唯一の神、宇宙の創造主、霊、全知、全能、永遠、不変、無限、偏在、聖、義、愛